

はばたきインクル支援だより



深谷はばたき特別支援学校 令和2年 9月 1日 No.23



前回は不登校のきっかけや継続理由などを文部科学省のデータから考えてみました。今回は不登校の児童生徒にどのように対応したらよいかを考えていきましょう。

特集 不登校の子どもの対応

1 基本として抑えること

子どもたちを取り囲む環境は大きく変化をしています。スマホなどを使って様々な情報を以前よりも簡単に手に入れることができるようになってきました。また「3つの間の消失」と言われるように、子どもの時間・空間・仲間がなくなってきています。人との関わりは少なくなってきていますが、決して人との関わりを求めているわけではないわけではなく、SNSなどのツールを使い、コミュニケーションを取っています。しかしこれらは顔と顔を合わせずにコミュニケーションを取ることができてしまいます。そのため、対人的なソーシャルスキルは弱まり(相手の反応を見ながらコミュニケーションを調整できない)、それによって自尊心の低下(どうして既読スルーなんだ？何を怒っているんだ？など)も危惧されています。

そういう環境の中で、子どもたちは適応しようと努力をしています。

適応不全を伴う背景を持つ不登校は、いち早く原因を改善しようと学校や家庭は努力をしています。しかし、子どもが環境に適応しようと努力をしてきた過程で、挫折や劣等感を味わってきていると、原因を取り去っても登校できないことがあります。また原因と思えるようなできごとが、実は意識的・無意識的に本当の理由を隠すうわべの理由になっていることもあります。

理由を取り除いたからすぐにうまく行くとはいえず、日常的な学校生活や友だちとの関係で、適応不全を抱えていた事実にも気付かなければなりません。

2 安心できる学級を作る

学級がどの子どもにとっても安心した居場所になるためには、先生や友だちとの温かいふれあいと、集団で生活する上での最低限のルールが必要です。ルールは特別難しいものではありません。まずは挨拶をしたり「ありがとう」を言うことです。友だちが話している時にはその人を見てうなずきながら聞きます。お互いを認め合うような話し方や聞き方ができるようにします。「私も同じように思っていたんだ」「すごいね」など、気軽に声をかけあえるようにします。また、「うざい」「死ね」など相手を傷つけるような言葉を使わず、「そういうのは嫌なんだよ」と感情を上手に言葉にできるようにします。日頃から自分の気持ちや困っていることを言語化できる力を育てることが大切です。

学級の時間や道徳で、ストレスについて取り上げ、いろいろな対処法をみんなで試してみたり、悩んでいるのは自分だけではないことに気付いたり、友だちへの声のかけ方を練習します。急に悩みを共有するのは難しいので、掲示物などを通して、友だちと共通の趣味を見つけたり、同じアイドルが好きだったりすることに気付けるようにします。

自主学習のノートに「先生に聞いてほしいこと」を定期的に書くように促します。

先生や友だちとの温かいコミュニケーションを通して、自分には仲間がいる・声をかけてくれたり、気にしてくれる仲間がいることを実感できるようにします。周りを育てることも大切です。

3 個別の教育支援計画を作成する

「不登校児童生徒、特別な支援が必要な児童生徒及び外国人児童生徒関係の支援計画例」が平成29年10月に文部科学省から出ています。これは子どもの基本的な情報の他に、不登校の理由・本人の状況や意向・保護者の状況や意向・具体的な支援計画をシートにまとめたものです。またケース会議などの記録もまとめられるようになっており、関連機関からの情報や、各機関等の役割や短期目標・評価を記録できるようになっています。

登校できるようになるために、何を重点に指導すればよいかを具体的に考え、計画的に取り組めるようにしてきます。

4 相談の場を整える

子どもが困っていることを安心して話せる場を整えます。「相談室はもうある」「保健室でも相談はできる」だけではなく、利用する子どもたちがそれらの場所をどのように捉えているのかを考えます。例えば、「相談したいことがあっても保健室には1日1時間以上いてはいけないというルールが学校にあり、そのために相談しづらいということはないか」「相談室に行ったことを保護者に話してしまうのではないか」「相談室を利用している自分を友だちはどう思うか」これらを学校全体で考えていくことが大切です。

特に不登校の学校でのサインとして、「身体の不調を訴え、保健室に行くことが多くなる」「休日の翌日や特定の教科の日に欠席が多くなる」というものがあげられます。保健室は子どもからのサインをキャッチする重要な場になります。

それぞれの場が子どもに対して何ができるのかを考えます。

5 介入困難なケース

不登校の原因を安易に子どもとその家庭にあると決めつけると、学校は子どもや保護者に批判的になり、保護者は反動で子どもを責めたり学校に不信感を強めてしまいます。

難しいケースは確かにあります。子ども自身に不安が強かったり、相談や医療の受診を拒絶するような場合です。自分自身をあきらめてしまって投げやりになっている時もあります。家庭では、子どもの状態の悪化を心配して、大きな変化を促せない場合や、保護者自身が対処を取れないことがあります。保護者のみの相談もうまく進まない時があります。

学校だけで対処することが難しいことがあります。福祉や医療の緊急介入の必要性が高い場合には医療保護入院の対象になることもあります。(家族への暴力が激しい場合など。)

家庭や学校でのそれぞれの役割を整理したり、方針を確認します。家庭が孤立してしまっていることもあるので、利用できる福祉サービスの紹介、福祉による家庭の見守りにもつなげていきます。

6 長期化している場合

欠席が長期化すると、学校に行かないことが普通になってしまい、子ども自身がどうしたらよいのかを考えなくなってしまうことがあります。そこで週末には「来週はどうする？」などと尋ね、自己決定を促します。適応指導教室の情報なども与え、一度見に行ってみるか、利用してみるかなども子どもが自分で決定するようにしていきます。その決定を認めます。

「みんなが行くから」という理由で、本人が望まないのに高校に入学しても、入学式から全く登校できないケースもあります。現実的な進路を考えるとともに、学校を卒業しても利用できる支援の場を探し、つないでいくことが大切です。子どもが自分自身の特質を理解し、必要に応じて障害者手帳を取得し、障害者雇用をはじめ、各種サービスを利用することも考えます。

